

北欧の作曲家たちを聴く

プログラム

夏本番を迎えました。今回のCDコンサートは「北欧の作曲家たちを聴く」と題して、北国の熱い音楽をお届けします。エイノユハニ・ラウタヴァーラ（1928～2016）は現代フィンランドを代表する作曲家で、8曲の交響曲の他、さまざまなジャンルに作品を残しました。晩年は多くの演奏家から作曲依頼があり、今日お聴き頂く「ファンタジア」は名女流ヴァイオリニストアン・アキコ・マイヤース（1970～ ）に捧げられた最晩年の作品です。アルヴォ・ペルト（1935～ ）は2017年から国連によって北欧に分類されたエストニア出身の作曲家で、簡素な音の組み合わせを、一定のリズムでくり返す「テンティナブリ」（鈴の声）という様式を用いた独特の作風で知られています。今日は最も良く知られた名曲「フラトレス」を名手ギドン・クレメル（1947～ ）の演奏でお聴きください。ノルウェーの大作曲家グリーグ（1843～1907）は国民主義的傾向とドイツ・ロマン派的傾向の両方を持ち合わせ、管弦楽曲から室内楽、ピアノ曲、歌曲に至るまで、優れた作品を数多く残しました。25歳の時に書かれた唯一のピアノ協奏曲は、彼の代表作に留まらず、古今のピアノ協奏曲の名作のひとつに数えられています。ノルウェー出身の名ピアニストレイフ・オーヴェ・アンスネス（1970～ ）とエストニア出身の名指揮者ネーメ・ヤルヴィ（1937～ ）指揮による演奏です。デンマークのカール・ニールセン（1865～1931）は異なった調性を同時に使用する「多調性」を駆使した革新的手法で20世紀の北欧音楽に多大な影響を与えた作曲家ですが、今日はニールセン作品の中では、親しみやすい曲として知られる「アラジン」組曲の抜粋をアメリカ生まれのスウェーデン人名指揮者ヘルベルト・ブロムシュテット（1927～ ）の指揮でお聴きください。フィンランドが生んだ大作曲家ジャン・シベリウス（1865～1957）の最後の交響曲である第7番は、古典的な4楽章交響曲の要素を凝縮して一体化、単一楽章で書かれた曲で、自身の交響曲の到達点を示した傑作です。フィンランドの名匠パーヴォ・ベルグルンド（1929～2012）がベルリン・フィルを指揮した演奏のあと、最後は代表作交響詩「フィンランディア」をフィンランドの俊英ミッコ・フランク（1979～ ）指揮の演奏でお聴きください。（中川）

エイノユハニ・ラウタヴァーラ（1928～2016）：

“ファンタジア”（ヴァイオリンとピアノのための）

アン・アキコ・マイヤース（ヴァイオリン）/江口 玲（ピアノ）

（2017.4.23 カンサスシティ・シンフォニーホールでのLive）

アルヴォ・ペルト（1935～ ）：

“フラトレス”（ヴァイオリンと弦楽と打楽器のための）

ギドン・クレメル（ヴァイオリンと指揮）ドイツ室内管弦楽団

（1991.7.28 サルツブルク、モーツアルテウムでのLive）

エドワード・グリーグ（1843～1907）：

ピアノ協奏曲イ短調Op.16

レイフ・オーヴェ・アンスネス（ピアノ）

ネーメ・ヤルヴィ指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

（1992.2.17 ベルリン、シャウシュピールハウスでのLive）

*** 休憩 ***

カール・ニールセン（1865～1931）：

付随音楽 “アラジン” 組曲

①祝祭行進曲 ②ヒンズーの踊り ③イスパハンの市場 ④黒人の踊り

ヘルベルト・ブロムシュテット指揮ストックホルム・フィルハーモニー管弦楽団

（2019.12.8 スtockホルム・コンサートホールでのLive ～ノーベル賞記念コンサート～）

ジャン・シベリウス（1865～1957）：

交響曲第7番ハ長調Op.105

パーヴォ・ベルグルンド指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

（1988.2.12 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive）

交響詩 “フィンランディア” Op.26

ミッコ・フランク指揮バンベルク交響楽団

（2000.10.13 東京オペラシティ・コンサートホールでのLive）

曲目解説

ラウタヴァーラ：ファンタジア

エイノユハニ・ラウタヴァーラは1928年10月9日、ヘルシンキで生まれたフィンランドの作曲家で、ヘルシンキ大学とシベリウス音楽院、ジュリアード音楽学校で学び、コーブランドらに師事しました。最初はロシア国民楽派の影響を受けていましたが、その後、新古典主義、十二音技法と20世紀の音楽の流れを反映するかのようになつて作風が変化し、21世紀になると神秘的・瞑想的な作品を多く残し、2016年にこの世を去りました。晩年のラウタヴァーラは、世界的なヴァイオリニストたちから「作品を書いてほしい」という依頼を何度も受けていました。「ファンタジア」は2015年にアメリカの名女流ヴァイオリニスト、アン・アキコ・マイヤースの依頼によって作曲され、彼女に捧げられました。作曲家の死後、2017年3月カンサスシティ交響楽団、マイケル・スターンの指揮で世界初演され、日本初演は2019年2月、兵庫芸術文化センター管弦楽団の定期演奏会で、アン・アキコ・マイヤースのヴァイオリン、岩村力の指揮で行われました。今回はヴァイオリンとピアノによる編曲版でお聴きいただきます。

ペルト：フラトレス（ヴァイオリンと弦楽と打楽器のための）

アルヴォ・ペルトは1935年、エストニアのバイデという小さな町で生まれました。1963年、27歳でタリン音楽院を卒業。初期の作品ではシヨスタコーヴィチやプロコフィエフ、バルトークから12音技法やミュージック・セリエルの様式などからの影響を強く受けた後、西洋音楽のルーツへの回帰に転向し古楽へ、やがて独自のティンティナブリ（鈴声）様式を見出しました。これは限られた数の音で順次進行する短い旋律の繰り返し返し、その各音にいくつかの簡素な三和音が、ある規則のもとに分散してつけられていき、その三和音がただ一つの鐘の音のように鳴り響くので、ペルトはその方法をティンティナブリ（小さな鐘）様式と名づけ、彼の基本的な作曲様式となっています。「親族、兄弟、同士」といった意味を指す「フラトレス」は、1977年にエストニアの古楽団体ホルトウス・ムジクスからの委嘱によって作曲された作品で、「ティンティナブリ様式」による書法で生み出されました。ペルトの作品の中で最も演奏頻度が高く、かつ有名な作品です。後にペルト自身によりいくつかの異なる楽器のために編曲され、独奏ヴァイオリンと弦楽合奏の版や、ギドン・クレーメルのために編曲されたヴァイオリンとピアノのための版等が現在多く演奏されています。

グリーグ：ピアノ協奏曲イ短調Op.16

ノルウェー国民楽派を代表する作曲家グリーグは1943年6月15日、ノルウェーのベルゲンで生まれました。1958年から3年半ライプツィヒ音楽院で作曲とピアノを学び、その後作曲家ゲーゼに師事、「ペール・ギュント」をはじめとする管弦楽曲や全10集に及ぶピアノのための「抒情小曲集」等、多くの名曲を残しました。唯一の**ピアノ協奏曲**は1862年19歳の時に着手、6年後の1868年に完成しました。翌1869年4月3日、グリーグの親友エドムンド・ノイベルトのピアノ独奏でコペンハーゲンにて初演され、曲はノイベルトに献呈されました。この初演を聴いた大ピアニスト、アントン・ルビンシュテインはいたく感心し、ノイベルトに会い「この曲を書いた天才によるしく伝えてほしい」と言ったという逸話やリストを訪ねて見てもらった時に初見で弾いたリストは「見事な出来だ」とグリーグを励ましたという逸話が残っています。当時から高い評価を得ていたこの曲は、古今のピアノ協奏曲の中でも一際名高い名曲として親しまれています。

第1楽章 アレグロ・モルト・モデラート 第2楽章 アダージョ

第3楽章 アレグロ・モデラート・モルト・エ・マルカート

ニールセン：付随音楽『アラジン』組曲

1865年6月9日、デンマークのノーレ・リユンデルセで生まれたカール・ニールセンは北欧を代表する作曲家で、1884年作曲家ゲーゼに認められて、デンマーク音楽アカデミーの作曲科に入学、1888年卒業後、弦楽四重奏曲第一番等いくつかの作品を発表して本格的な作曲活動を開始し、のちに異なった調性を同時に使用する「多調性」を用いた革新的な手法で20世紀北欧音楽に決定的な影響を与えました。シベリウスと並んで、北欧を代表する6曲の交響曲、ヴァイオリン、フルート、クラリネットのそれぞれの協奏曲も優れた作品として知られています。**付随音楽「アラジン」**はデンマーク王立歌劇場におけるアダム・エーレンシュレーアーの戯曲「アラジンと魔法のランプ」の上演のために、1918年から19年にかけて作曲されました。ニールセンの死後1940年に全5幕31曲から7曲を抜粋した組曲版が出版され、近年は吹奏楽のレパートリーにも加えられて親しまれるようになりました。プロムシュテットの演奏会では4曲が演奏されています

①祝祭行進曲 ②ヒンズーの踊り ③イスパハンの市場 ④黒人の踊り

シベリウス：交響曲第7番ハ長調Op.105

シベリウス：交響詩『フィンランディア』Op.26

1865年12月8日、フィンランドのハメーンリンナで生まれたジャン・シベリウスは最初ヴァイオリニストを志しますが、人前で上がりやすい性格を知り、作曲家への道を進み、ドイツ・ロマン派、ロシア国民楽派の影響を受けながらも、次第に独自の作風を築きあげ、大作曲家としての地位を確立しました。**交響曲第7番**はシベリウス最後の交響曲で、第6番と同じ頃、1910年代に着手し、1924年に完成、同年3月25日にシベリウス自身の指揮でストックホルムの楽友協会コンサートで初演されました。古典的な4楽章交響曲の要素を凝縮して一体化、単一楽章で書かれた自身の交響曲の到達点を示しています。初演時に「交響的幻想曲」と呼ばれていたこともある奥深い美しさに溢れた傑作です。

交響詩「フィンランディア」は帝政ロシアの圧政に苦しめられ、独立運動が起こっていた1899年に作曲され、1900年に改訂、同年7月2日、ヘルシンキでカヤヌス指揮ヘルシンキ・フィルの演奏によって初演されました。ロシア圧政への反抗心、祖国の自然への賛美を謳い上げ、のちに国民讃歌にもなった愛国心あふれる名曲です。